

中央大学通信課程を卒業。45歳から司会業を始める。現在、ミュージカル劇団ティンカーベル旗揚げ公演のために稽古中。

「六十三歳の演劇少女」

お星様の五つの角に男の子と女の子がぶらさがっている。「星をさがしに～Findeng Your Star～ミュージカル劇団ティンカーベル 旗揚げ公演」のチラシができてきた。来年三月二六日、隣町の文化会館小ホールでの上演が決まり、今立ち稽古に入っている。輝きたい自分、人生にごほうびをあげよう、自分たちの舞台を作ってみようよ、等々、小さなつぶやきが共鳴し合っ、ミュージカル劇団の発足と、動き出してしまった。

四人の子どもたちの二番目が台本を、曲も詞もうんうんいいながら書き上げた。長女はチラシのイラストを、三女は仲間を集めて事務局担当、四番目の長男もいつのまにかソロを歌う役者に。もちろん母さんも「星の王子様」役。幕が開いて私の台詞「やあ、精が出るのう、星つかい長のネリルよ」で物語は始まる。

母さんが上がっちゃうとみんなペアだよ、と誰も言わないけれど、私は密かにプレッシャーを感じ、「これは大変じゃ」と思っている。

自称演劇少女のまま、歳を重ねて六十を過ぎ、孫三人に恵まれたおばあちゃんの私。中学・高校と放送劇団に入ったり、小さな演劇集団の研究生になったり、ひたすら「女優さん」を目指していた私の夢は、身体が弱くていつも大事なときに持ちこたえられず、「いつか好きなお芝居をしたらいいよ」と言われたのが殺し文句、「今にできるよ」と思いながら結婚出産子育て。板の上で演じる夢をあきらめてもっぱら観る人、楽しませていただく人になっていた。

いつか自分たちの劇団を作って自分たちの芝居をして、たくさん、生活にちょっとくたびれた人たちを励ましたい。これが長い長い間温めていた私の大事な夢だった。大人になっても、時折、むくむくと心の奥底から湧いてくるのを感じていた。特に東京で何カ月ぶりかのお芝居見物の後の夜など、寝ている子

を起こしてしまったように胸がザワつく。

「いつかね」と、自分に言い聞かせている自分があった。

夢ってサ、昼間見るものよ、なんて子どもたちには言いながら、自分はどうなのさ、となると、六十を過ぎて諦めるのはちょっとしゃくな気がする。もうあと残り時間の決まっている今、精一杯やり残しのない生き方がしたい。そんな思いが子どもたちに通じてしまったのか、次女がミュージカル劇団を作りたいと言いだし、三女が友達に呼びかけ、この指とまれで集まってきた総勢三十名、親子姉妹が十一組と五人の仲間。準備万端整うまで待つより、その気になったとき始めようよ、とGOサインを出してしまったら、若い力が本当に動き出してしまった。

東京に行けばなんでもあるけど、文化が中央に集中しすぎている。自分の暮らす街で自分たちの文化を創ろう、が私の長年の主張だった、ミュージカル劇団を立ち上げてみると、いろいろな分野の専門的な人たちが力を貸してくれる。歌の指導者は埼玉から駆けつけてくれている。演出家も心意気が気に入ったと仲間入りをしてくれた。みんなきらきら輝いているからすごい。

初めは楽屋でみんなの出入りの手伝いをしようと思っていたのに、「おばあちゃんが出ないとお客の動員がきかないよ」と言われて一役買うことにした。何十年ぶりかの台詞にとまどいながら、ウキウキワクワク、今これが私の人生の集大成かと思ったりしている。